市民国際プラザ －ダイジェスト－

第105号　（2021年9月30日発行）

地域に飛び出す市民国際プラザ！

『市民国際プラザ』では、国際協力や多文化共生に関する自治体、地域国際化協会、NGO/NPO等の相談に対応しています。更に、各地の**先進的な活動**を取材し、本ダイジェストでご紹介しています。

(特活)西東京市多文化共生センター／NIMIC　東京都西東京市

◆「ともに住み、ともに生きる」～市民の力を集め、多様性を尊重する西東京市へ～

代表理事の山辺真理子さんと副代表理事の田辺俊介さんにお話を伺いました。二市合併により西東京市が誕生する以前、地域日本語教室活動を行っていた山辺さんたちが近隣5団体の連絡会で意見交換をする中で、国際交流組織の必要性が認識されます。2004年西東京市には同連絡会メンバーも加わり「国際交流組織設立検討懇談会」が設置され、2006年には市長に提言書を提出、NIMICの前身の設置に至りました。

「地元に古くから伝わるうどん作りを、JAメンバーの協力で実施」

NIMICは外国出身者を中心に据えているものの目指すところは多様性を尊重し、共に生きる地域づくりです。2020年会員から募集して決定したキャッチフレーズは「ともに住み、ともに生きる」。団体名を決定する際、中国出身者のメンバーから「中国人にとって『多文化共生』は当たり前。『国際交流』という文言が入らないと、外国人住民を含まない活動と受け取られてしまう」という意見を受けたため、当初の名称は「西東京市多文化共生・国際交流センター」でした。2008年に法人化し、その際に中国出身者の理解も得て現在の「西東京市多文化共生センター」に名称変更しました。

活動は、自主事業、市との共催事業、市の委託事業があり、それぞれの事業、活動に適した運営形態を取っています。市役所はもちろんのこと、近隣の大学と連携し、大学生や留学生を巻き込んだ活動を行う他、企業からも高い信頼を得ており、日本語スピーチコンテストには継続的な協賛を受けています。行政の多言語相談窓口である「多文化共生センター」もNIMICが受託し、英語、中国語、韓国語、スペイン語で対応する窓口には幅広い相談が寄せられます。

多様な事業展開を行う一方で、NIMICは実に最小限の活動費で運営され、市からの委託事業も然りだそうです。それでも活動を絶やさず継続しているのは、市民＝CITIZENとして地域に貢献することの大切さからとのこと。実際、山辺さん、田辺さんお二人からも非常に高い使命感を感じました。西東京市では、環境分野、子育ての分野でも市民活動が活発だそうです。NIMICも、それぞれの得意分野を活かしながら活動する熱心なボランティアに支えられており、最近スマホに対応にするウェブサイトができたのは、ITに詳しいボランティアの力だそうです。今後は、企業のSDGsへの機運と合わせて一層の連携強化を目指した取り組みを検討されているとのこと。高い市民意識を基盤とした西東京の「ともに住み、ともに生きる」地域づくりの更なる進化が期待されます。

西東京市多文化共生センターのウェブサイトはこちら　https://www.nimic.jp/

◆「多文化共生支援団体リスト」をご活用ください！！

（一財）自治体国際化協会（クレア）のウェブサイトに掲載していた**「多文化共生支援団体リスト」**を、市民国際プラザのウェブサイトに移行しました。様々な分野で多文化共生社会推進のために活動する各地域の国際交流協会、NPO等民間団体、ボランティアなどについての情報を提供し、その団体の活動への理解を深めながら、平時からの連携のための情報交換やネットワークづくりを目的として作成しています。ぜひご活用ください。

http://www.plaza-clair.jp/interview/list.html

～ 市民国際プラザを広く皆様に知っていただくために～

市民国際プラザのFacebookに**「いいね！」**をお願いします！♪

市民国際プラザ －ダイジェスト－

第105号　（2021年9月30日発行）

地域に飛び出す市民国際プラザ！

『市民国際プラザ』では、国際協力や多文化共生に関する自治体、地域国際化協会、NGO/NPO等の相談に対応しています。更に、各地の**先進的な活動**を取材し、本ダイジェストでご紹介しています。

（特活）岡山日本語センター　岡山県岡山市

◆多様な人々の相互理解と共生に向けた本質的な教育の場としての地域日本語教室を目指す

毎年恒例の「ふれあいパーティ」会員手作りの料理で、一般市民と受講生等が楽しく過ごします

理事長の浦上典江さんは夫の仕事で3年間生活したマレーシアのペナンから帰国後、多文化共生が当たり前だった生活から一転、当時の岡山は外国人に会うことも稀で、多文化共生の意識が薄いと感じたそうです。そんな折日本在住15年の外国人女性から「街に出るのが怖い」と打ち明けられました。「何とかしなくては！」と早速行動を開始します。行政への働きかけも重要と考え、岡山県庁とも粘り強く交渉を重ねました。瀬戸大橋着工が開始した時代、国際化推進の流れにも乗る形で1984年岡山日本語センター（OJC）設立にこぎつけました。

元は英語教師の浦上さんはペナン在住時日本語教室も開設しました。帰国後は大学で英語と日本語教育に従事。その経験も活かして、日本語能力向上に有効な教科書をレベル別に5種類制作しました。OJCは言語の4要素に「文化」を加えた「5要素統合教授法」を実施しています。言語と文化は一体だからです。そして、日本語指導研修を細やかに行い、互いを尊重し信頼し合える教室運営に努めています。自国の宗教・文化や我が街の問題点、優れた点を日本語で議論し合うことが本質的な相互理解に繋がっています。

現在は2カ所の拠点で9クラスを運営しています。コロナ禍で開講日の減少や、オンライン化のための資金調達も課題ですが、日本語学習の問い合わせは絶えません。日本語教育推進法制定で日本語教育が普及に向かうのを歓迎する一方、「日本語教育の本質」が失われないか危惧もしています。OJCは「知識や技術として」の語学習得だけではなく、相互理解に繋がる「本質的な教育」の場の提供を目指しています。そのため、市民との文化交流行事、国際理解学習支援、企業等での授業、日本語教育情報交換なども行っています。ボランティアだからこそ、そうしたOJCの理念を共有しながら活動できると感じているそうです。多様性を尊重し共生社会を実現する上で、日本語教育の果たす重要な役割について示唆をいただきました。

感染対策をして開催した国際交流フェスティバル「出羽庄内国際村 ワールドバザール」

（公財）出羽庄内国際交流財団　山形県鶴岡市

◆国際都市鶴岡の市民発の国際交流を後押しし、多様化の進む外国人との共生をサポート

事務局次長の佐藤幸さんにお話を伺いました。鶴岡では民間の国際交流が大変盛んで、ペルーの日本人学校で勤務された方が帰国後関係資料を鶴岡市に持ち帰り、国際交流活動を開始。賛同した若者を中心に草の根の交流が発展し、留学生のホームステイ受け入等も行われてきました。そうした活動の受け皿となる拠点として1993年行政が財団を設立した形です。

財団では国際交流、国際理解、多文化共生の事業を行っています。外国出身者を講師とし、活躍を促す講座もたくさんあります。元は日本人配偶者が多かった地域ですが、現在はベトナムからの技能実習生が増加しています。鶴岡市にある山形大学農学部に通う留学生もいます。国際交流の盛んな鶴岡市、ボランティアも大勢参加しているので、コーディネートも財団の重要な役割です。設立後10年ほどはイベント開催が中心でしたが、ニーズの増加や活動の浸透を背景に、近年は相談業務、翻訳通訳業務に重点が置かれているそうです。市は多文化共生事業を財団に委託しており、多言語相談は財団が担っています。コロナ禍でも個別の相談は対面で行うことができます。一方で、海外への派遣や受け入れ事業が出来ないため、人的交流のある韓国・釜山やインド・ムンバイ、昔から継続的に交流を行っているアメリカ・コロラド州などのオンラインツアーを行っています。観光名所より、一般家庭の暮らしの様子、家の中や冷蔵庫の様子などの人気が高いそうです。今後もしばらくはオンラインツアーを拡充していきたいとのこと。また、外国人が以前より多様化しているので、少数の人たちが孤立しないよう財団との繋がりを持っていただくことを強化したいとのことでした。

盛んな国際交流を背景に外国人との共生が進む鶴岡市の今後の発展が楽しみです。

出羽庄内国際交流財団のウェブサイトはこちら　https://www.dewakoku.or.jp/